令和２年度　東国文化自由研究レポート

研究テーマ

なぜヤマト王権と群馬は密接な関係にあったのか。
～群馬とヤマト王権の繋がりを探る～

提出日　令和２年８月２４日

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

１年　４組　５番

氏名　遠藤きいな

1、調査の動機・目的

以前、東国文化についての本を読んでいた時に、群馬はヤマト王権と密接な関係だったため、大きな権力を握って、東日本最大の古墳大国になったということを知り、なぜ群馬はヤマト王権と密接な関係だったのだろうと、不思議に思ったから。

2、調査方法

①実際に資料館に行って調査する。

・かみつけの里博物館
・上毛野はにわの里公園

② インターネットで調査する。

③資料本を読んで調査する。

3、調査結果

1、古墳時代のヤマト王権

3世紀の後半から、大規模な古墳が近畿地方の大和に建造され始める。これは強大な権力を持った勢力の出現を意味しており、大和王権の母体となる政治勢力が誕生したことを表している。

↳ ヤマト王権誕生

日本を代表する豪族居館として、三ツ寺I遺跡が群馬にある。
5世紀後半～6世紀初め頃の関東の豪族の館跡が発見した。
このことから、ヤマト王権の支配が関東にも進んでいたことが分かる。

三ッ寺1遺跡は、幅30～40mの大規模な周濠をめぐらした一辺約90mの方形を呈し、濠に面した斜面には古墳の葺石ふきいしと同じように石が葺かれている。また、柵で南北に二分されていて、南地区の西よりには13.6メートル×40メートル深さ約3～4mの濠を巡らせている。

その大きさから、ヤマト王権には強い権力があったことと、三ッ寺1遺跡から、群馬と強い繋がりがあったことが分かる。

2、古墳時代の群馬県

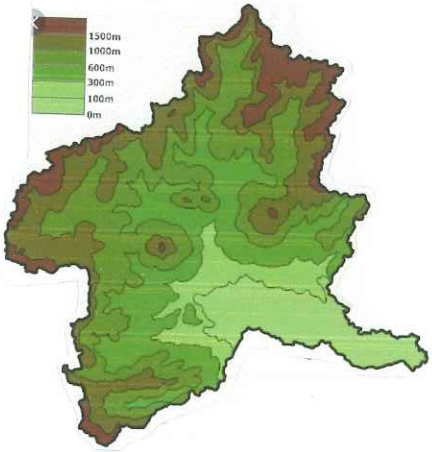
5世紀中葉頃、東日本最大級の古墳、天神山古墳が築造された。その他にも、巨大な古墳が次々と造られた。平成24年の全県域の調査により、群馬では、1万3240基の古墳の存在が明らかになっている。

また、この頃、埴輪の生産もとても盛で、質、量ともに日本一を誇っている。

これほどにも古墳造りや埴輪造りで群馬が優れていたのは、自然環境の豊かさと大陸からの先進技術が理由に挙げられる。群馬は周囲の山々から幾筋もの川が平野部に流れ出て、肥沃な土壌と豊富な水が得られたり、山麓や台地部で、木の実や果実、作物が豊かに実ったりしたため、水や食料に困ることなく古墳を造り続けられたり、古墳造りに必要な材料がすぐに手に入ったりする。そのため、古墳が造りやすい環境だったことが分かる。

また、群馬では古墳時代に大陸の先進技術が導入され、土地開発や馬生産などが開始された。7世紀以降も、この先進文化と技術を

基盤として、新たに文字や仏教文化を取り入れ、高い生産力や技術を保持していた。もちろん、古墳大国になった理由として、ヤマト王権やヤマト政権と密接な関係だったから、というのも含まれる。



3. ヤマト王権の支配力

弥生時代に、奈良盆地でもっとも高い生産力をもった地域集団は、古墳時代に「おおやまと」古墳集団となって*佐紀古墳集団をとり込み、ヤマトの支配を実現し、王権を確立した。そして、しだいにその支配領域を拡大し、5世紀に倭国の王となり、6世紀に王と有力氏族による権力の仕組みを完成させた。

*佐紀古墳集団…奈良盆地北部を中心としていた集団のこと。

← ヤマト王権の支配領地

(濃い部分がヤマト王権の支配地)

4、群馬とヤマト王権の関係

(出土品から分かること)

古墳時代前期の豪族にとって、そのランクを決める最上級のアイテムは「鏡」であった。三角縁神獣鏡はヤマト王権との強い絆の証として各地の豪族に配布された鏡の一つと考えられている。東日本からは17枚しか出土していない中、群馬だけで12枚も出土している。
そのことから、ヤマト王権がいかに上毛野国を重視していたかが、分かる。

←三角縁神獣鏡
(玉村町、川井稲荷山古墳)

古墳時代の鏡は姿や顔を映すというより、光を反射させて人々を惹きつける道具だった。

(古墳から分かること)

前方後円墳はヤマト王権の象徴であり、その分布はヤマト王権の広がりを示すとされている。そして、2000年の前方後円墳調査で、分かった数は、約400と、とても多い。このことから見ても、群馬とヤマト王権は強い絆の関係があったことが分かる。
また、古墳の中の長持形石棺は、畿内では「王家の石棺」といわれ、

大王級の古墳でしか見られないものである。
そんな石棺が、太田天神山古墳とお富士山古墳（どちらも群馬の古墳）で使われているのだ。石材は地元産を使っているが、石を削って形を作る作業は難しいため、ヤマト王権が専門の工人を特別に派遣したものと考えられている。これは、群馬とヤマト王権の繋がりを決定的にさせる証拠だと思う。

←二子塚古墳石室（安中市）

音塚古墳石室（高崎市）→

（横穴式石室から分かること）

6世紀になると安中市の築瀬二子塚（やなせふたごづか）や前橋市の前二子古墳などで横穴式石室が作られるようになる。
それまでは古墳の頂上に遺体を埋葬する竪穴式の施設だったが、5世紀に朝鮮半島から横穴式石室が伝わり、まずヤマトと北九州で作られた。上毛野国は東日本で最も早く、他の地域より約50年も早く作られている。この事実からも、ヤマト王権が上毛野国をどれだけ重視していたかを知ることができる。
そして、横穴式石室に伴うさらに重要な技術は、天井にかける巨大石材の運搬である。観音塚古墳の推定60トンの天井石をはじめ、数十トンもする巨石を

修羅（運搬具）で運ぶことは容易ではなく、ヤマト王権による技術指導を特別に受けられる関係にあった。

↑
修羅を曳くイベント（大阪府）

発掘当時の修羅
（大阪府）
↓

（仏教の影響）

7世紀後半の宝塔山古墳は、この時期の群馬地域において最上位の古墳である。一辺約60mの方墳で石室内に家形石棺が置かれている。この石棺の脚部に「格狭間」という仏教築等に見られる加工がなされている。

当時、畿内ではすでに権威の象徴は古墳づくりよりも寺院建築になっていた。ヤマト王権が新たな思想として広めようとした仏教を、上毛野国の最有力者が古墳の中に表現したことは、時代の変換を知る上で重要である。いち早く仏教を取り入れたことをこのように形として残している地域は少なく、その一つが群馬である。このことからも、ヤマト王権との関係の深さを知ることができる。

4、考察

3ページ目から古墳時代、群馬は環境にめぐまれており、東日本の中で優位な位置にいたことが分かる。

そしてその群馬をヤマト王権は重視していたと考えられる。

→ではなぜ？

なぜヤマト王権は群馬を重視したのか？

このころは、大規模な古墳が強い権力の印だったから、古墳が造りやすい環境の群馬に目を向けたと考えられる。

⇒このことから、

群馬とヤマト王権の関係が強かったのはヤマト王権の権力を上げるためなのか？

と考えることができる。

7ページ目の仏教の内容からも分かるように、群馬とヤマト王権は協力し合っている。

⇒このことから、群馬はヤマト王権の権力を上げるために協力をしたと言えるだろう。

しかし、そのために、関係を築き上げていたわけではないだろう。

これはヤマト王権が群馬を認め、群馬が努力をしていたからだと思う。

以上のことをまとめると、

群馬は古墳造りに適した環境。

⇓

それにヤマト王権が目をつけた。

⇓

権力を上げるため、ヤマト王権が群馬に寄り添った。

⇓

群馬がそれに合うように努力した。

密接な関係が生まれた

と考えることができる。

5、感想

私は、「なぜヤマト王権と群馬は密接な関係にあったのか？」というテーマをもとに、研究を進めた。
実際にかみつけの里博物館に行ったり、本で調べたりなどして群馬とヤマト王権の特徴や関わりを知ることができ、より確かな研究結果を得ることができた。群馬とヤマト王権の密接な関係の理由について自分なりの結論を出すことができてよかったと思う。
今回調査を進めていく中で、「なぜヤマト王権は東北を支配することができなかったのだろう。」という疑問を持ったので、次回の課題にしたいと思う。

6、参考文献

・東国文化副読本
・https://www.pref.gunma.jp/contents/000237005.pdf
・https://ci.nii.ac.jp/naid/120006595849/
・https://sekainorekisi.com/japanese-history/古墳の出現とヤマト政権/8-ヤマト政権と政治制度/